

2018年度 学校評価自己評価

1. めざす学校像

2019. 3. 31

<p>大阪女学院の建学の精神 (ミッションステートメント/2009年9月15日制定)</p> <p>大阪女学院は 創造主を畏れ キリストの教えに従って 一人ひとりを愛し 何が重要であるかを見抜く力を養い 喜びをもって 進んで社会に仕える人を育む</p>	<p>大阪女学院が育もうとする学生・生徒像</p> <ul style="list-style-type: none"> *キリスト教に基づく愛と奉仕を実践する人 *自由な学びの中から、物事の本質を見つめ、自己の進路を選ぶことのできる人 *英語力を基礎に幅広い教養と公正な判断力を身に付け、自律的・主体的に行動できる人 *性別の役割にとらわれずにあらゆる可能性に挑戦し、女性の尊厳の確立に努め、リーダーシップを発揮する人 *社会の課題に関心を持ち、世界、日本、地域のために仕える人
---	--

2. 中期的目標

<p>運営基本方針 (2014～2019年度/Ⅰ期及びⅡ期中期計画において)</p> <p>グローバル化の進展に伴う市場原理による競争主義の台頭により、我が国においては、経済をはじめとして社会のあらゆる分野における既存のシステムの変革が迫られている。さらに、「知識基盤社会」における「知」は容易に国境を越えるものであることから、グローバル化は教育と密接な関わりを持つことは論を待たない。大阪女学院は、このような環境変化に的確に対応するとともに、130年間にわたり育んできた精神を堅持し、2014年度から2019年度において、次の方針によって、健全な運営を創出する。</p> <ul style="list-style-type: none"> *教職員の知恵と力を結集して、歴史と伝統に証される良き学校運営を継承する。 *これまで育んできた学生・生徒像、人格を育む教育力、積み上げてきた教育・研究活動の成果を広く社会にアピールし、学生・生徒の安定的な確保に力を注ぐ。 *本学の建学の精神を実現するために変化しなければならないことについては、強い決意をもって迅速な対応を行う。

<p>I. 建学の精神と教育理念の実践</p> <p>1. キリスト教に基づく人間理解の深化 大阪女学院中学校・高等学校は、女性が一人の人格として、何らかの方法で働く義務を悟り、正直に仕事をするを誇りとし、日常生活の雑事を越えて、物事を見抜く力をもつ人間を育むことを目指す。宗教教育については、長年の実績を踏まえた上で、キリスト教に基づく人間理解を深め、一人ひとりがかげがえのない存在であることの自覚を促し、生徒自らの生き方と他者とのかかわり方を学ばせる。また、入学後、保護者に対しても、学校への理解を深めてもらえるよう努める。</p> <p>2. 建学の精神の再認識と再構築 本校生徒、教職員の誰もが自分の内面に向き合う礼拝の時間を大切にし、祈りの中で他者に使える志を涵養することで、国際的なミッションによって設立された女子教育機関という建学の精神を再構築していく。</p> <p>II. 教育の内容と学習支援の充実 教育理念を具現化するため、自身に与えられた賜を活かし、社会に貢献するために生涯学習を通じて学習を続け、成長をしていくことの出来る「真の学力」～学力、協調性、人権意識、規範意識、国際性～の習得を目指す。 国が示すグローバル人材の育成、高大接続改革等は、創立以来本校が目指してきた教育理念と重なり合うところから、探究型・教科横断型・アクティブラーニングへの移行に積極的に取り組む。 また、本校は国際バカロレア日本語ディプロマ(以後 IB・日本語 DP と表記)の認定校となり(2018年2月)、2018年度高校入学生の2年次に DP がスタートする。このワークショップに専任教員全員が参加することを目標にし、学校全体の今後の改革につなげていくことを目指す。</p> <p>1. 学力向上の取り組み～新しい学力観への対応 学力についての考え方が「思考力・判断力・表現力」及び「意欲・経験・多様性」を重視する方向に大きく転換していく現代、本校が従来から行ってきた国際的な視野と主体性を育てる教育活動をさらに進めていく。また、先進的な教育活動を研究し、導入する。</p> <p>(1) 自学自習、自己管理力の養成…OJ ダイアリー、学習計画表の活用 (2) 論理的思考力の育成…中1・2「論理エンジン」の導入、中3探究型課題学習(2018年度からスタート) (3) シラバスの検討・改善…教科学習のシラバスの見直しとともに・宗教・人権学習・ボランティア・クラブ活動・生徒会等の活動を関連づけ、総合的なプログラムの構築を目指す。 (4) 英語科、英語教科としての英語改革…高2英語科対象イベント授業の継続、発展。4技能英語外部検定取得の体制づくり(高1・2への speaking の導入) (5) 「国際特別入試制度」(中学2015年度入試より)の継続と発展…入試広報に努め、この制度による入学生の学習プログラムの整備を進め、国際理解教育を推進する。 (6) 国際バカロレア日本語 DP 候補校として認定校を目指し、探究型・教科横断型の授業を展開する為に全教職員で学びを進める。また海外への進学を含め、世界を視野に入れた進路指導を行う。(先述の通り2018年2月に認定校としてスタートしている。) (7) 高等学校普通科理系の2コース制の導入…受験生及び中学内部進学生のニーズに応じて開設した理系1類、2類を充実したものとし、希望進路を保障できるよう整備する。</p> <p>2. 国際理解教育の推進 留学や留学生との交流を通じ、言語への関心を深め、言語や文化の違いを知ることで、世界に目を向け、広い視野をもって物事を考える生徒を育てる。YFUの年間留学生受け入れに加え、オーストラリアのRavenswood校(姉妹校)との交換留学、カナダのオタワにあるLongfield Davidson校(姉妹提携校)…これは2019年度をもって姉妹提携校としては発展的解消とすることになった)、YFU 韓国 からの短期交換留学(1ヶ月)との交流を通して、国際(異文化)理解に取り組む。また、交換留学制度を利用して、留学を希望する生徒の支援をしていく。 高等学校3年間で実施している現行留学制度(夏期海外研修・短期留学・年間留学)に加え、2016年度にスタートした高等学校1・2年時3学期に実施する中期留学制度の充実を図る。</p> <p>3. 生徒・教員の人権意識を深める取り組み、生徒の心身の健康と安全を守るための生活指導と生徒支援 「私たちの人権感覚を問い直そう ～一人ひとりを大切にしよう～」を目標に人権学習に取り組む。 人間関係を構築する力の育成 ～ルールの遵守、マナー・礼儀の尊重、コミュニケーションによる他者理解～に努める。SNSを利用の知識、メディアリテラシーについて適切に学ぶ。</p> <p>4. 学校行事による集団づくり さまざまな行事への生徒の主体的な関わりにより、集団の中で自他を活かして協調性、創造性を育む。</p> <p>III. 教育の実施体制の改善</p> <p>1. 生徒の安定的な人数確保のための取り組み (1) 広報の充実 (2) 説明会・学校訪問への全教員での取り組み (3) 入試対策室の充実 (4) 中学「国際特別入試制度」の継続と発展</p> <p>2. 組織改善の取り組み 一貫教育充実のため、中高6年を偏りなく経験できる人事、世代交代を見据えた指導理念・スキルの継承のためのベテラン教員の人事を行う。</p> <p>3. 中学・高校としての図書館機能の充実 (1) 蔵書充実 (2) 利用教育 (3) 図書委員会活動 (4) 広報の充実 (5) その他タブレット端末活用の授業の為の環境整備</p> <p>4. 教員の人材育成 (1) 建学の精神及び世界の変化・課題についての学び (2) 支え合う組織づくり (3) 他校との連携 (4) 新しい学力観・授業形態への対応 (5) 人権意識の向上</p> <p>5. 中高大短連携プログラム (1) 宗教・解放プログラム (2) グローバル進路 (3) 大学院との合同プロジェクト</p> <p>IV. 生徒支援 生徒の自己実現を促す進路指導</p> <p>1. 生徒の自己実現を促す進路指導 (1) 進路選択への指導・助言 (2) 基本的学習習慣の確立(OJダイアリー・ビッグシスター制度など) (3) 英語外部検定試験への対応 (4) 新しい大学入試への対応 (5) 併設大学・短大の特色を活かした進学指導 (6) 協定校推薦枠の拡大</p> <p>2. 心身の健康と安全を守るための生活指導と生徒支援 保健室・教育相談室・サトルーム及び病院・関連機関との連携。教員の支援スキル向上。スマホ依存・トラブルへのサポート</p> <p>V. ICT教育の推進 ICT技術を、今後の探究型、横断型授業に活かしていくことができるように研究する。(2018年度に中学南校舎、高校北・東校舎にWi-fi設置を行った。)</p> <p>VI. 教務の新(入力)システムの導入準備 独自システムではなく、多くの学校が採用している入力システムを本格的に研究する</p> <p>VII. 危機管理 大地震を想定した危険回避訓練を教職員で検討する。また食料・水等の備蓄の拡充、自宅への連絡方法の確認、帰宅困難者が出た場合の対策について検討する。 地域の避難所としての対策を検討する。重要情報・個人情報の漏洩防止への対策を行う。 (2018年度は6月に大阪北部地震、9月に台風21号による被害を経験した。)</p> <p>VIII. 施設・設備の保全と充実 南校舎外壁補修継続、チャペルの空調及び校舎の空調設備の整備等、優先順位を決めて工事の計画を進める。(2017年度に南校舎外壁補修工事は終了)</p> <p>IX. 教員の労務環境改善 1週1日の研修日の維持改善に努め、より働きやすい職場にしていくよう努力する。育児短時間勤務を3歳から小学3年生までと改訂。介護休暇についても検討を進める。</p> <p>X. 経費削減と効率化 中高大短、法人の事務の一元化を適宜進める。諸経費の見直し、管理部門の経費削減と効率化を図る。補助金制度を有効活用する。</p>	<p>2016年度事業計画より</p>
--	---------------------

【自己評価アンケートの結果と分析】

自己評価アンケートの結果と分析	自己評価アンケートの結果と分析	自己評価アンケートの結果と分析
○生徒 [2018年12月実施]	○保護者 [2018年12月実施]	○教職員 [2019年2月実施]
<p>宗教教育・解放（人権）教育について</p> <p>宗教教育について、肯定的な回答率はこれまでの傾向と変わらず、程度の差はあれ、中2で停滞または落ち込みが見られるが、学年が上がるにつれて本校の目指す教育目標を理解し、キリスト教的な考え方を身につけていくことがわかる。ただ、今年度は高2において横ばいであった。</p> <p>解放（人権）教育についても、宗教教育とほぼ同じ経過をたどる。ただここ数年は中2での落ち込みが緩やかになりつつあったが、今年の中3は中2から引き続きなだらかではあるが下降傾向が続いている。今後の推移を見守りたい。自我が芽生える時期のこのような傾向は、程度の差はあれ成長の過程である。宗教、解放のプログラムでの学びは、学年が上がるにつれて、これまで継続してきた基本的な人権、平和についての学びを継続しつつ、現代社会の課題である様々な国の人々との共生、(発展途上国のみならず)日本の中にある貧困、子どもの権利、非正規雇用、ジェンダーギャップ、トランスジェンダーなど、目の前の事象を見つめて、自身の進路や生き方と直結するものとなっている。高3までの3年もしくは6年間で、どの学年も各々の個性や人格を尊重し合い、解放プログラムで取り上げる社会的なテーマに関心、理解を深めることに繋がっている。加えて、宗教教育プログラムで聖書の言葉に触れて自己の内面を洞察し、他者との関わりについて考えを深めていく。徐々にではあるが確実に、自己肯定の心を持ち、自分自身の言葉で考え、自分自身が社会に良い変化をもたらす主体制のある者として自覚し、他者を受容し、助け合うために学ぶという意識が育っている。</p> <p>昨年度本校で起こった差別問題事象は、韓国・北朝鮮との関係やヘイトスピーチの現実等が学校現場に影響を与えたとも考え、中学段階の4月当初から学習プログラムに「在日コリア、在日外国人」を取り上げたり、その主題での教職員の学びも行った。引き続き学校をあげて意識した取り組みを続けていきたい。</p>	<p>保護者アンケート回収率は、中学68%、高校60%</p> <p>昨年度よりも高校で回収率アップ率が高まった。お手数をおかけする中、ご協力に感謝する。</p> <p>課題の多い項目については、保護者のご支援に感謝しつつ、一歩ずつニーズに応える努力を行っていききたい。</p> <p>本校に入学したことについて、今年度も、全学年の92%の保護者が肯定的回答をくださった。</p> <p>学校の教育方針も87%以上の保護者に理解されているという昨年度と変わらぬ結果となり感謝であった。</p> <p>このことは、本校のPTA(本校ではへール会と呼ぶ)役員の方々のご活動も大きな支援となっていることに感謝を申し上げたい。</p> <p>本校のキリスト教教育が、生徒の日々の学校生活や行事、PTA(へール会)活動を通して保護者によく理解されていることは本校の教育の大きな強みである。キリスト教教育を土台とした本校の教育方針が、生徒の人格形成、生涯にわたる学びの礎となっていることが認知されているということは、生徒を教育する上で最も重要な点であり、教職員と保護者が一致して、生徒の人格教育にあたっているということを再確認した。これが本校の教育の最も大きな特徴である。</p> <p>ニーズにあった教育活動、また教職員の熱意については、昨年度と同じ80%以上の肯定的な回答を得た。</p> <p>学校行事、生徒会活動、クラブ活動については、肯定的な回答が90%を超え、満足度は高く持っていた。クラブ・行事の学習との両立は常に課題としてあるが、全人格的な成長のために、これらの活動が果たす役割はとて大きく、生徒が主体となっているなか、協力して目標を達成していく活動をこれからも大切にしていきたい。これらは、一貫教育の中で、学習や将来の進路選択、夢の実現へのモチベーションアップに確実につながっている。</p>	<p>教職員への自己評価アンケートは、下記の表「3. 本年度の取り組み内容および自己評価」における「評価指標」に基づいて行った。前年度との比較を行う主旨から、中期計画の項目と関連させたアンケート項目を立てた。</p> <p>また、分析は肯定的回答のパーセンテージを確認しながら進めたが、教員の回答は、例年と同様にどの項目についても、「思う」よりも「やや思う」のパーセンテージが高い傾向にあり、また2018年度の振り返りにおいては、より一層の「やや思う」までの達成感率が低く、このことは、掲げている課題への道は険しく、教職員が現状に満足せず、まだまだ高いところを目指している途上であることがわかる。</p> <p>I. 建学の精神と教育理念の実践</p> <p>キリスト教に基づく人間理解の深化／建学の精神の再認識と再構築</p> <p>キリスト教教育による人格形成、生涯学習の土台の形成について、肯定的な回答は80%で、昨年度より13ポイント上回った。この要因は何であるかを、生徒アンケートとの関連性も併せて考えて、対策を講じていきたい。</p> <p>II. 教育の内容と学習支援の充実</p> <p>学力向上 中高6年間を見通して、基礎学力を定着させることに加えて、改革される大学入試に対応するカリキュラムを創るべく各教科で改訂作業を継続している。その上で各々の授業計画、指導目標を立て、授業を行っている。「目標を明確にできたと思う」と肯定的回答を寄せた教員は77%であり、昨年度とほぼ横ばいである。時代の変化が激しく、教職員の世代交代が行われる中、また今年度は国際バカロレア(以後IBと略す)認定校として本格的な指導体制が始まったので、IBカリキュラムから学ぶことも多い。そんな現状の中で目の前の生徒と向き合い、根気強く指導の質を維持しようと奮闘している教職員の姿が見えてくる数字である。(中学生の授業アンケートに見られるA「教員の授業内容への年間計画」、B「授業のわかりやすさ」がさらに数ポイントアップしていることにも表われている)、教員間で研究や相談し合いながら発展させていきたい。</p> <p>一方で、「1年間で生徒の学力(学力推移、スタディーサポート等を参考に)は上昇したと思うか」との問いについては、今年度は42%と下降した。この要因も上記につながるものと考えている。</p>
<p>生活指導について</p>		
<p>生徒達は、本校の生活指導の中心になっている「本当の自由」への理解～人に言われるのではなく、自分で考えて時々に応じた言動をとる～という目標については、その考え方を理解している。誇りを持って目指していく姿勢は中1から持っており、しかし学年が上がるごとに実行の難しさに直面し、その重要性を更に深く理解して行くことになる。中1での意識は年ごとに開きがあり、70～90%を推移するが、高校生では早い段階で90%近くに到達していく。</p> <p>具体的な「社会のルールや公共のマナーが身についているか」「基本的生活習慣(遅刻、片付け、身だしなみなど)は身につけているか」という質問については、80～90%台を推移する。これら生徒たちの評価は、大人の目から見た評価よりも甘めであるように思う。中高ともに自分の言動の不十分な点には気づいていないところが多いようだ。よって具体的な指導を事あるごとに丁寧に行う必要がある。保護者との連携を行い家庭の協力を得て進めていきたい。</p>	<p>教育環境、施設設備の整備についても90%の保護者から肯定的回答をいただいた。</p> <p>庭の草花や木々は、創立から135年大切にしてきた重要な教育環境であるが、2018年度は、高校北・東校舎の外壁補修を行ったことで、特に高校3年生の方々には受験期と重なったことでご迷惑をおかけした。2017年度中に中学・高校両方の校舎のWi-fi環境を整え、また中学校舎1階にEnglish activityのためのスペースを設けたこと、学年末に図書館をリノベーションすることで、教育活動の広がりが出てきた。さらに有効的に活用していきたい。</p>	<p>自己管理 数年前から、学力向上を目指すため、スケジュール等の自己管理能力養成は必須であると考え、中学生からこの課題の指導に力を入れてきた。自主学习時間(昨年度より中1・2は「論理エンジン」の学習に切り替え)、OJダイアリーの取り組みなどである。「自己管理力の向上」についての教員アンケートの結果は、やや下降したが、取り組みの継続が重要である。今後は主体性、積極的な姿勢、自己管理能力はますます重視される時代となる。情報の溢れる中、自分に必要な情報を選ぶこと、スケジュールを立て自分の生活を管理していくことは課題解決型、探求型学習への第一歩である。SNSから大量に配信される情報を有効に活用して時間とエネルギーを自身の向上のために使うためには、授業・評価のあり方そのものの転換が必要であり、それこそが今行われている教育改革の中心となるだろう。</p>
<p>大学入試改革等に伴い、スマホやタブレット、パソコンの学びの場への導入を必要に応じて進めている。eポートフォリオの作成や、課題探求型の学びに取り組む必要から、また授業以外の自学自習や放課後学習のツールとして、SNS利用についてのリテラシー、著作権、盗作等アカデミックオネスティーについての学習プログラムの構築が必要である。一方、スマホ依存の傾向にある生徒が顕著になってきたので、その指導方法の模索も大きな課題の一つである。</p>	<p>また、大地震に備えてのマニュアル、備蓄や必需品の整備も少しずつ進めている。その最中に2018年度は、6月に大阪北部地震、9月に台風21号により、学校そのものは大きな被害を受けることはなかったが、本校でも多くの生徒宅が被害を受けて不便を被った。6月の地震の際には帰宅困難生徒のために急遽バスをチャーターして帰宅補助をした取り組みは、今後のためにより経験となった。</p>	<p>授業・補習内容の充実 高校生の希望者補習(水曜・土曜講座)、自習用講座(BB講座)の成果については昨年度から30ポイントも大きく下がった。昨年度の反省を生かし、内容を刷新し、古典と数学は「センター目標8割」、英語は「スピーキング重視」と発展的な内容と絞った講座としたのだが、功を奏さなかったようである。次年度は「学習動画」を取り入れた内容で展開を考えている。</p>
<p>挨拶の取り組みは、中1から中2で下降する傾向にある。思春期独特の心理も関係するかもと思うが、気持ちはあっても声に出して表現することが苦手な生徒が多い。高校生になると実行できる生徒が増えていくが、高3以外は70%台を推移する。社会での大切なコミュニケーションの第一歩として、取り組みを続けたい。</p> <p>「自己管理力が身についたか」については、3年前の取り組み当初に比べて、中1での意識づけは出来るようになったが、モチベーションを維持、向上させることは難しく、高1までは60%台を推移し、高2で75%、高3でようやく80%に達する。今後も生活指導のみならず日常学習定着の重要な項目として、この自己管理力の獲得が上げられる。OJダイアリーや試験2週間前学習計画表の提出など、具体的な取り組みを続けながら推進したい。</p>	<p>家庭への連絡、情報提供については、肯定的回答は平均すると77%であった。昨年度から2ポイント下降したことで、年々下降気味である。</p> <p>本校での保護者への連絡ツールの主なものは生徒に持ち帰らせるプリント類である。行事や、クラブ等についての情報提供としては、学年、学級通信、H.P.のクロズドサイト等がある。緊急時はNTTコミュニケーションズのFairCastを利用している。</p> <p>この結果から考えられることの一つ目は、保護者宛のプリント類が、生徒から適切に手渡されていない可能性があること。二つ目は、思春期の子どもたちの学校生活に対して、保護者としては心配が多く、学校からの細やかな情報提供を求めておられるということである。おそらく、行事や予定等の連絡はもちろんであるが、我が子の学習状況やクラス、クラブ活動での様子などを知っておきたいという思いである。学校での様子を全く話さなくなる生徒もいる中で、保護者の気持ちとして共感できる。教職員・保護者が生徒の自律・自立を阻害しないように、見まもりを続けるためにも、学校と保護者間の信頼と連携が重要である。</p> <p>また、個別に対応が必要な生徒に対する連絡や手当についても教科担当と担任の細やかな連携が必要であ</p>	<p>一方で分割授業、習熟度別授業については、肯定的な回答は、昨年度から5ポイント上昇。また、電子黒板や、MM(マルチメディア)教室の利用につきも5ポイント上昇であった。その使用に広がりが見られてきたということであろうか。英語、理科など多くの教員による継続的な利用・工夫が進んでいる教科がある一方で、まだまだ限られた教員の利用にとどまっている教科も多い。さまざまな教科の授業に活用していきたい。Wi-fi環境を整えたが、それにつながる端末機器は、セキュリティ重視の面から、教員の「Clomebook」のみとしているため、授業での活用にまだまだ制約がかかっているのは否めない。</p> <p>今年度のビッグシスターによる放課後学習プログラムに加え、基礎学力定着学習プログラムについては、さらに3ポイント上昇であった。それぞれにその意味があるものと捉えている。</p>
<p>学校行事について</p>		
<p>学校行事については、今年度も、生徒会主催の行事、学年ごとの行事、6学年共に85～90%以上の生徒が、「生徒同士のつながりを深めるために有意義である」と答えている。しかし、今年度高校1年生においては昨年度よりも下降が見られることから、友人との関係構築に難しさを覚える生徒が多いのかもしれない。依然生徒の行事への満足度は大変高いことがわかる。これは生徒が主体的に行事を運営し、かつ参加していることによる成果である。</p>		<p>新しい学力観・大学入試改革への対応 上記課題について、「教科、学年での話し合い、準備の進捗状況」については、約35%の教員からの肯定的回答となったが、昨年度より5ポイント下降となった。国際バカロレアのカリキュラム、評価方法を学びつつ、学校全体で取り組みを続けていきたい。また「英語の外部検定受験への働きかけ」については、昨年度は授業の中で普通科文系でも取り組みが始まったこともあり肯定的回答が高まったが、今年度は12ポイント下降となった。進路委員会を中心にいろいろと対策をしているが、目の前の生徒達の学習意欲の現状との差を多くの先生は感じ取っているのだろう。</p> <p>「協定校推薦制度の進路保障の意義」についても昨年度より11ポイント下降している)。協定校推薦の人数枠が25名から40名に拡がり、推薦入試出願までに要求される到達レベルが上がったが、そ</p>

学校生活について

「楽しく充実している」については、「クラブ活動が活発である」という項目について、85～96%の肯定的回答が得られるものの、多くの学年で昨年度よりポイントが下降していることを注視していきたい。これは次の項目との関連付けが考察され、つまり生徒からの相談に対する教員の姿勢、生徒の学校生活への教員の指導姿勢についてであり、55%～80%台まで学年によってばらつきがあるものの、いずれも前年度よりもポイントが下降しているからだ。単純に大人に対する反抗期を迎えて壁にぶつかり、コミュニケーションや信頼が一旦崩れるものとは言い切れないと思っており、教職員全体でその対応について考えていきたい。

進路指導について

中2から中3にかけて、どの学年も高校のコース選択をきっかけに、進路についてよく考えるようになっていくようだが、高1で少しカーブが緩み、また、高2になって真剣に考えるようになる傾向がある。今年度の高3について高2から下降になった原因はわからない。ただ、「卒業後の進路に向けて考えたと思うか」の項目は、どの学年もほぼ同じ傾斜で右肩上がりになり、中2・3からは急カーブで肯定的回答率が伸びていく。このことは、進路指導部が様々な仕掛けを行っていることの成果とも言えよう。将来進みたい方向については中3で少しずつ見えてくるが、昨今の多様な大学入試のあり方、出題傾向の変化などから、教科選択や時間の使い方を意識的に決めかねる生徒たちの状況が、コース選択の高校での微妙なカーブに顕れているようである。

国際教育について

毎年、留学生との交流については、アンケートを実施した高校全学年で 85%前後の高い肯定的回答を得ているのだが、今年度の高校三学年全体ではポイントが下降している珍しい結果となった。今年度高2に所属した年間留学生との交流はととも実りあるものと見受けられただけにこの原因についてもよくわからない。単純に、昨今のコミュニケーション力の力不足がこのことを表しているのかも知れない。短期、中期で訪れる留学生とも仲良くなる生徒たちを見ると、先述のコミュニケーション力の向上に役立つことと、このような交流が何よりの互いの文化の理解と平和の基礎であると思わされるので、この取り組みはさらに大切に推進していきたい。

授業評価について

どの項目についても、例年のことではあるが、肯定的な回答は高校生が高く、中学生では若干低い値となっている。その中で今年度の特徴とすれば、昨年度と同様、中学の中でも中学1年生の肯定的な値が高いことが見られた。また、昨年度も挙げていたが、D「教科内容の興味、関心を持てる」項目は、数%ずつとは言うものの、毎年下がってきていることについて、より魅力ある授業を行えるよう工夫することが大事なことであり、その一つとして、生徒が能動的に学習できるような授業形態、授業外学習への促しがより必要になってきたと言えよう。I B の A T L (approaches-to-teaching-learning) をより取り入れていきたい。各教員の授業評価は、同じ教科、同じ学年を何クラスか担当している教員の評価が、クラスによってかなり差があることから、教員と生徒の関係づくりが、授業成果に直結していること、また教員の声かけ、発問一つでその教科への生徒の興味や意欲が喚起されることが確認できる。また、このアンケート結果は全教員へ個別に知らせているが、次年度からはそれを受けて自己点検(評価)が出来る形態も考えていきたい。

るが、行き届いたサポートを行うには課題も多い。保護者と協力してその生徒に必要なサポートに今後も努めたい。

学校としては、配布したプリント類は、クローズドサイトにその都度アップすることとし、また、必要な情報は H.P. や学年、学級通信を利用して提供していきたい。また、高校1年生から“Classi”の活用も始めたので、この機能を使つての連絡方法も開発していきたい。保護者にも、できる限り子どもとの対話を心がけていただきつつ、心配なことについては、学校に連絡をいただき、連携して見守るように今後も努めていきたい。

へール会(PTA)活動について、例年通り保護者の約90%から肯定的回答を得た。

本校はPTAを創立者の名前をとってへール会と呼んでいる。先述のとおり、へール会の役員(本部委員・学年委員・学級委員)は、担任をはじめ教職員と協力して、互いの親睦をはかりつつ、学校の多くの活動に協力してくださっていることで、教育活動へ大きな貢献をいただいている。

また、生徒数の減少、物価の高騰、消費税率の up 等で、へール会会計逼迫の折から、経費削減のため、昨年度から夏の親睦会を取りやめ、クリスマス会への会費値上げや参加人数増を呼びかけるなど工夫を凝らして、安定的な運営を実現してくださったことで、会計においても健全運営が行えていることは感謝である。(ただし、生徒の教育活動には大きく影響が無いようにしていただっている。)

中高6学年の保護者有志、教職員約200名が集うクリスマス会、私学助成のための署名活動は保護者全員にご協力をいただいている。また、発足して7年になるお父様の会ウエルミナ・メンズクラブ(WMC)の会員も少しずつ増え、へール会への父親の関心も高まり、行事への参加者も年々増えている。

また、本部役員の方々には、日常の教職員へのサポートのみならず、広報活動として校外で行う学校説明会(evening 説明会)において、保護者の立場から学校の紹介をしていただく形でご協力をいただくこともご協力いただき、感謝申し上げます。

の基準を目指して入学時より努力する生徒もおり、早い時期から学ぶ動機と意志をもつ契機となっていることはよいことであるものの、そうでない進路を目指している生徒たちへの影響のことを懸念していることへの現れであろうか。生徒達の進路対策は個々によって異なっている。それぞれに丁寧に指導していくことが重要である。

英語科・英語教科の改革

「英語科高2生徒全員を対象としたエンパワーメント授業について」、また「外部検定目標への取り組みについて」の肯定的回答は75%、「国際特別入試制度及びその制度による入学生の課外授業の成果についての肯定的回答は50%と低い数値であった。今中1は22名であった国際特別入学生も次年度は16名と一昨年度並みとなった。

理系2コース(2類・1類)の導入

内部生、高校入学生ともに理系への関心が高いことから、2類難関理系大学志望、1類幅広い理系大学志望として作年度より2コース制を導入して3年目であった。このことが、生徒たちの進路選択の幅を拡げ、希望する学習環境の提供に役立ったかという問いに対して、肯定的解答は27%(昨年度60%)であったことは、やはり理系1類の生徒のモチベーションを引き上げることに苦勞している点が挙げられよう。理系進路を諦めず、1類の生徒達がモチベーションを保つには、しっかりと学習に取り組めるような仕掛けが必要なのだが、その現状をどのように対策していくかが急務の課題である。

生徒の生活全般に対する指導

SNSの利用については、「生徒への適切な指導について」肯定的回答は36%(8ポイント下降)、「保護者の理解と協力を得られたかについて」肯定的回答は40%(11ポイント下降)となった。保護者の危機感も年々強くなり、学校としても保護者向け講演会を持ち、保護者との連携を目指しているが、個人情報や画像の無断 up、人間関係のこじれ、依存による学習、健康への影響、ネットとのトラブルや被害などは後を絶たない。指導を受ける生徒の延べ数は少しずつ減る傾向にあるものの、その依存率が大きな生徒がいることも否めず、小学生時代からスマートホン使用をしている問題を感じる。

服装、身だしなみ、挨拶、公共のマナーの指導について、どれも肯定的回答はいずれも上昇であった。生活指導委員会を中心にした日々の取り組みによる成果である。

また、文科省からの指導に従い、本校でも「クラブ活動に関するガイドライン」を2018年度末に策定した。生徒の発達段階に応じたクラブ運営となるよう心がけていきたい。

留学への取り組みの充実

留学については、留学生の受け入れ、本校から送り出す留学生の学びの成果ともに充実しており、留学を希望する生徒へのサポート体制も整っているという教職員の認識(肯定的解答 73～75%)であるが、充実した交流サポートの項目はともに昨年度から下降している。これは生徒達のコミュニケーション力の低下が作用しているのではないかと思われる。めまぐるしく変化する国際情勢、ニーズの多様化、大学入試改革の方向により、卒業後の進路にも直結していくことから、情報収集と研究の継続が必要である。

人権意識を深める取り組み／心身の健康と安全を守る指導

学校、学年の人権プログラムの充実についても、支援教育(長期欠席、不登校傾向等の生徒への指導)・いじめの未然防止について、教職員のサポートについても肯定的ポイントが下降している。人間関係については教職員研修でワークショップを取り入れることもするなど取り組みは精一杯継続しているが、なかなか思ったところまで到達できず、互いの意見を交わし合いながら進めていくだけのゆとりを十分に持てていない教職員のジレンマが伝わってくる結果であろう。厳しい現実ではあるが、助け合い、生徒をサポートしていくことにたゆまず向き合っていきたい。

III教育の実施体制の改善

募集・広報活動 「本校の特色を活かした取り組みを提案、アピールできているか」「本校の広報活動、募集対策は適切か」「募集・広報に積極的に関わることができたか」の各項目について、肯定的回答率は昨年度よりも大きく下降し42%であった。教職員の募集への意識は高まり、広報活動への協力も得られているのだが、日常業務に圧迫を与えるようになってきていることの現れであろうか。時代の厳しさは増しこそすれ緩むことはないが、本校らしい教育を進めていくために互いに意見を交わし合い、課題を共有し、本校の魅力を受験生に伝えていくことで一致していきたい。

図書館活動

約17万冊の蔵書を誇る本校図書館は、中高大短が利用する充実した図書館である。専門知識を持つ司書(専任を含め6名)が、手厚く利用のサポートを行い、生徒の豊かな学びに貢献している。教職員の図書館の活用については昨年度よりも7ポイント上昇してきたがまだまだ活用を推進していきたい。またシステムやサービスの問題よりも教職員が多忙で、図書館を利用するゆとりがない現実も推察される。I B コーススタートが、図書館利用についても牽引役となることを目指し、また、年度末に1階を「ラーニングコモンズ」とする場としてリノベーションをおこなったことで、アクティブラーニング授業の活用にしていきたい。

教職員の研修プログラム

本校新任教員対象研修「チーム0J」の代わりに、キリスト教学校教育同盟の中堅者研修、カウンセリング研究会のプログラムへの参加を義務づけることにした。忙しい中ではあったが、参加した先生方は役立った実感を得たとの意見をもらった。アンケートでの肯定的意見は下降しているが、多忙を極

める現状の中ではあるが、自身の視野を広げ、働き方を見直す上でもこれらの研修会に参加することが必要であると強く感じる。学内の取り組み、また本校を会場にしたキリスト教学校教育同盟のプログラムへの参加等を今後更に呼びかけ、教員の学ぶ機会を保障するように考えていきたい。

IV 生徒支援

進路指導の取り組み 中学1から高校3年まで各学年での進路プログラムは生徒のモチベーションアップに大いに役立っている(肯定的回答73%(昨年から18ポイント下降)、高校3年生の大学入試直前のプログラムについても肯定的回答56%(昨年から17ポイント下降)であった。大阪女学院大学、短大との連携については51%(昨年度より8ポイント上昇)が進んでいると答えてくれた。大学短大のユニークで優れたカリキュラムに魅力を感じて、進学先の候補に入れる生徒も増えており、入試情報の共有等、連携が進んでいることは望ましいことである。

V. ICTを利用した授業等への取り組みの推進

今年度高1よりeポートフォリオを記すことが必須となり、学年分の“Clomebook”を設置し、“Classi”を利用してその指導にあたった。IBコース生徒は入学時よりClomebookを各自購入。また、今年度から始まった中3の探究型学習でもH.R教室で学校設置の“Clomebook”を利用してレポート作成してその研究が深まった。Wi-fi環境を整備したので、専任教職員全員には4月から貸与することを行い、一部の会議で利用を始めた。世の中は急ピッチで生徒1人に1台を持たせての学校生活・授業に向かって、時代が動いている。「ICT利用の計画は進んでいるか」の問に対し、47%の肯定的解答を得た。(昨年時39%)。しかし、セキュリティ関連からもっと整備を推進しなくてはならない。2018年度末にICT教育推進のためのガイドラインを策定した。

VI. 教務の新(入力)システムの導入準備

その準備に勤しんでいたが、年度途中で、旧来のサーバーが破損したことによる対応で、新システム導入は半年後ろにずれ込むことになった。

VII. 危機管理

生徒・保護者・教職員からのハラスメント(体罰を含む)についてのアンケートを実施し、上がってきた事象について対応を続けている。ハラスメント防止のための取り組みについての肯定的回答51%(2ポイント上昇)、ハラスメント委員会の機能についての肯定的回答は49%(2ポイント下降)である。実際何かしらのハラスメント事象は起こっており、ハラスメント委員の先生方にはご尽力を頂いている。一昨年度からの課題として、現代のハラスメントについての教員の認識の向上が急務であるため、アンケートの対応にあたる相談委員(教職員の互選)の立場の難しさはこれまでも指摘されてきているが、生徒と教職員自身の心身の健康、命を守るための重要な取り組みとして明確に位置づけて、互いに協力してこの課題に当たっていききたい。2018年度から全学院を挙げてそのための学習会を行った。今後も防止委員会が提案している研修を実のあるものにしていきたい。

「地震をはじめ防災への取り組みについて」は少しずつ進めているが、避難時の備蓄、地域との連携等まだまだ多くの課題があり、計画途上である。その為か回答での肯定的な率は昨年並みであった。まさに2018年度は、6月に大阪北部地震、9月に台風21号により、学校そのものは大きな被害を受けることはなかったが、本校でも多くの生徒宅が被害を受けて不便を被ったことも経験した。

VIII. 施設・設備の保全と充実

さまざまな施設設備の改修が必要となっている現状から、昨年からアンケートにこの項目を追加した。肯定的回答は昨年度より下降して60%であった。経済的な裏付けが必要なことでもあり、なかなか十分と言うわけにはいかないが、教職員の意見を聞き、理解を得て進めていきたい。

IX. 教員の労務環境改善

1週1日の研修日等労務環境の改善については、肯定的回答は64%(昨年81%)。これはこの制度が果たして職場の環境にプラスになっているかを再考しておかねばならない結果として管理職は受け止めている。労務環境についてさらに改善をめざしたい。

また、生徒の教育活動にも関わることだが、文科省からの指導に従い、本校でも「クラブ活動に関するガイドライン」を2018年度末に策定した。これにより教員の労働過多緩和につなげていきたい。

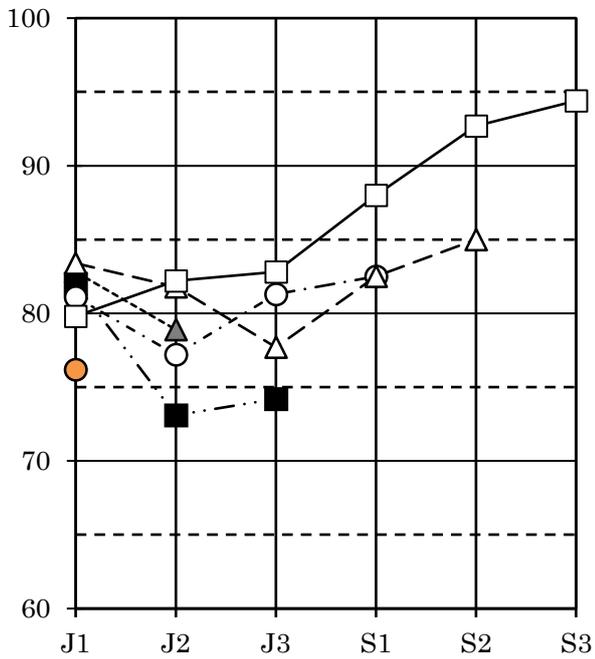
	<p>2. 国際理解教育の推進</p> <p>3. 生徒・教員の人権を深める取り組み/生活指導</p> <p>4. 学校行事による集団づくり</p>	<p>(7)理系2コース制の導入 理系を1類、2類の2コース制を充実したものとする。</p> <ul style="list-style-type: none"> YFUの年間留学生受け入れ オーストラリア Ravenswood 校(姉妹校)との交換留学 カナダ、オタワ Longfield Davidson 校(姉妹提携校)*2019 年度でもって提携を発展解消する。 YFU 韓国からの短期交換留学(1ヶ月) 中期留学(高校1.2年3学期)の充実 上記活動を通して国際理解教育に取り組む。 中学でのプレエンパワーメントを2018年8月からスタートさせる。 夏休み海外研修プログラムの見直し <ul style="list-style-type: none"> 人間関係を構築する力 ～ルールの遵守、マナー・礼儀の尊重、コミュニケーションによる他者理解～の育成 SNSを利用するための知識、メディアリテラシーについて適切に学ぶ。 授業・学級活動・生徒会活動・クラブ活動等の活動が安全かつ充実したものになるように努める。 生徒の言動・表情・着衣などを注意深く観察し、虐待の懸念・精神不安のある生徒を見逃さないよう、異常の早期発見に努める。 通学時の安全指導に努め、警察と連携しつつ不審者の警戒をする。 学校外での生徒の事故やトラブル、迷惑行為等の窓口となり対応する。 自主的、かつ計画的なリーダーシップ 協調性とチーム力 総合的な企画力・理力(時間、費用、あとかたづけ、ゴミ処理等) 企画・計画書、活動記録の作成、教員の助言と指導 	<p>15. 理系2コースの導入により、中学入学生及び高校入学生の進路の選択肢を拡げ、学習の充実をはかっていると思うか。</p> <p>(注) 以下中期計画の項目順で記載している。</p> <p>24. 留学生の受け入れにより、充実した交流ができたと思うか</p> <p>25. 本校から留学した生徒は、留学の成果を上げることができたと思うか。</p> <p>26. 留学を希望する本校生徒に対して、適切なサポートができていると思うか。</p> <p>19. SNS の利用について、生徒に必要な指導ができたと思うか。</p> <p>20. SNS の利用について、保護者に理解と協力が得られたと思うか。</p> <p>21. 服装、身だしなみの指導は適切だと思うか。</p> <p>22. あいさつについての指導は適切だと思うか。</p> <p>23. 公共のマナーについての指導は適切だと思うか。</p> <p>28. 学年、学校の人権教育のプログラムは、時代の変化に対応し、充実していると思うか。</p> <p>37. 教職員組織はキャンパスハラスメント事象の防止に積極的に取り組んでいると思うか。</p> <p>38. キャンパスハラスメント委員会 及び調査は、有効に機能していると思うか。</p>	<p>27%</p> <p>76%</p> <p>76%</p> <p>73%</p> <p>36%</p> <p>40%</p> <p>51%</p> <p>31%</p> <p>31%</p> <p>56%</p> <p>51%</p> <p>49%</p>	<p>理系2類・1類の2コース制を敷いて3年目である。初めての大学受験を経験させたので進路希望指導に添えたかの検証を行いたい。</p> <p>留学生の受け入れについてはYFUの年間留学生1名他、中期・短期数名の受け入れにより、よい交流が実現した。</p> <p>留学については、高校1年生から短期・中期・長期とさまざまなプログラムが設けられており、生徒、保護者からも評価を得ている。時代のニーズが高まる中で、より実質的な内容をともなったものにするべく努力を行う。</p> <p>以前から本校では一定の海外進学生が居たが、今後もさらに充実していくものと考えている。2018年度導入するIBコースは海外進学を目指す生徒にとって意義深いものになるだろう。その充実の為に、海外進学指導担当者の設置を検討している。</p> <p>夏期海外研修を精査し、ボストンとモンレーの2カ所に整理した。加えてアカデミック研修として「セントメアリーカレッジ」を導入したが最低携行人数に満たず実施を見合わせた。</p> <p>中学でのプレエンパワーメントを希望者を募って夏期休暇中に学内で行った。参加生徒は有意義な学びとなった。</p> <p>SNS の利用指導は、喫緊の対応を迫られている課題である。保護者自身の意識が少しずつ高まり、危機感をもって家庭での管理の必要性が理解されてきたように思う。しかし、進化していくSNS利用について、生徒自身が管理を行うことは至難の業である。実際、依存度が高く問題に発展したケースもあった。保護者と協力して生徒の指導に当たりたい。</p> <p>身だしなみ、挨拶、公共のマナーについての指導は徐々に成果をあげつつある。今後もさらに指導を継続する。</p> <p>解放(人権)教育のプログラムについては、キリスト教教育の「愛と奉仕」の実践と一体となって生徒の心の成長、生きる力となって実を結んでいるが、時代の変化のなかで、テーマ、シラバスの見直しについて委員会での検討が必要である。</p> <p>本校のさまざまな行事は、宗教教育、解放教育とともに、生徒の人格形成に大きな影響を与える教育である。生徒は、行事に主体的に関わる中で、人と繋がり、自分が責任を担い、仲間とともに何かを達成していくことの意味を深く感じて、広い意味でのソーシャルスキルを身につけている。</p> <p>キャンパスハラスメントについて、年度末のアンケートへの取り組みや委員の働きは評価されているが、防止のためには十分とは言えず、不断の努力をしていきたい。</p>
<p>III. 教育の実施体制の改善</p>	<p>1. 生徒の安定的な人数確保のための取り組み</p> <p>2. 組織改善の取り組み</p> <p>4. 教員の人材育成</p> <p>3. 図書館機能の充実と教員との連携</p>	<p>(1)広報の充実</p> <p>(2)説明会・学校訪問への全教員での取り組み</p> <p>(3)入試対策室の充実</p> <p>(4)中学「国際特別入試制度の継続と発展</p> <p>(1)中高6年を偏りなく経験できる人事</p> <p>(2)世代交代を見据えた指導理念・スキルの継承</p> <p>① 建学の精神の学び</p> <p>② 世界の変化や課題についての学び</p> <p>③ 支え合う組織づくり</p> <p>④ 他校との連携</p> <p>⑤ 新しい学力観への対応</p> <p>⑥ 新しい授業形態(アクティブラーニング)への対応</p> <p>(1)蔵書の充実 (2)利用教育</p> <p>(3)広報の充実 (4)図書委員会活動</p> <p>(5)その他</p>	<p>32. 変化する時代の中で、社会の課題に対して大阪女学院の特色を活かした取り組みを提案、アピールできていると思うか。</p> <p>33. 本校の広報活動、募集対策は適切だと思うか。</p> <p>34. 募集・広報に積極的に関わることができたと思うか。</p> <p>36. 解放・生活指導等教職員研修会、チームOJ(*2017年度で終了)、学院全体研修会、キリスト教学校教育同盟主催の中堅者研修、カウンセリング研究会等は、学校運営、教職員の集団づくりに役立っていると思うか。</p> <p>35. 授業、進路指導において、図書館を有効に利用できたと思うか。</p>	<p>42%</p> <p>56%</p> <p>60%</p> <p>36%</p> <p>51%</p>	<p>昨年同様に教職員全員で募集・広報にもあたっていくことができた。殊に中学校訪問は、本校の教育内容を現場の教師が紹介することを目指している。また、本校教員自身にも外から学校を見る機会となった。引き続き中学校との連携を大切に続けていきたい。</p> <p>オープンキャンパス、イブニング説明会、地域説明会、入試説明会、キャンパスナビと本校の魅力を教員一人一人のことで受験生に伝えることができた。私学の受験事情は今後も厳しい。生徒の成長を第一とし、教育内容の充実を大事にして、運営を進めていきたい。</p> <p>教職員世代交代が続く中、建学の理念をはじめとして、指導上の財産の継承が急がれる。ふだんの業務の中だけではなく意識的に語り合う機会が必要である。多忙を極めるため研修への参加もままならない現実であるが、その学びをしていくことの意味は大きい。教職員間で、互いの悩みや募る思いをことばで伝える機会が重要であるので、その体制作りにも尽力していきたい。</p> <p>全生徒への丁寧な利用ガイダンスが行われ、授業や課題などで、十分活用できる充実した図書館であり、司書の助言も受けられるため恵まれた環境であるが、生徒の自由な利用を別にすると、一部授業で利用されているにとどまる。今後の授業、レポート課題等における利用の研究が必要である。</p>

	5. 中高大短連携 プログラム	(1)宗教・解放プログラム (2)グローバル進路 (3)大学院との合同プロジェクト	18. 大阪女学院短大・大学との連携は進んでいると思うか。	51%	中高の卒業生、教員の、大学短大への認識は変わり、とても身近なものになってきた。教育内容への理解が進み、評価も高くなっている。連携は進んでいる。
IV. 生徒支援	1. 自己実現を促す 進路指導	(1)進路キャリアガイダンスの充実 (2)基本的学習習慣の確立 (0Jダイアリー・ビッグシスター制度) (3)英語外部検定への対応 (4)新しい大学入試への対応 (5)併設大学・短大の特色を活かした 進学指導 (6)協定校推薦枠の拡大	16. 各学年で行われる進路プログラムは、生徒の意識、意欲を高めるために役立っていると思うか。 17. 3学期のセンター対策、私大、2次対策のプログラムは、大学入試直前のサポートとして成果を上げていると思うか。 12. 現在の協定校推薦制度は、生徒の進路指導、進路保障のために十分に活用されていると思うか。 18. 大阪女学院短大・大学との連携は進んでいると思うか。	73% 56% 73% 51%	中高での進路指導のプログラムは、生徒により影響を与えている。また進路室からのさまざまな情報の発信は時代の変化に対応して、適切である。 国公立入試センター、前期、後期入試をサポートする高3、3学期のプログラムは、対象の生徒を支え、成果を上げるために定着しつつあるが、さらに改革していきたい。 関西学院大・同志社女子大・神戸女学院大との協定校推薦制度は、推薦枠が拡大され、魅力ある制度として生徒たちの進路保障に役立っている。同時に、高校在学中にかなり高い英語力が求められるため、早い段階から検定に挑戦し、学力レベルの向上に努める生徒が増えている。 大学・短大の教育内容への理解が進み、進学生の各大学での評価も高くなっており、連携は進んでいる。
	2. 心身の健康と 安全を守る生活指導と 生徒支援	自ら健康の保持増進を図る能力を育成する。 そのために保健室・教育相談室（学校カウンセラー）、サポートルームが連携し、生徒・保護者をバックアップする。必要に応じて医療機関や関係諸機関と連携をとり、適切な支援を目指す。	29. 長期欠席、不登校傾向等の要支援生徒への支援は適切であったと思うか。 30. いじめ等の事象の発生を未然に防ぐため、意識的に取り組めたと思うか。 31. さまざまな課題について、教員間でコミュニケーションを取り合い助け合って取り組むことができたと思うか。	71% 60% 51%	支援教育委員会(2010年設置)は、教頭がコーディネーターを担い、担任、学年主任、スクールカウンセラー、養護教諭、サポートルーム指導員、生活指導部長、教務部長が構成員となり、校長のもとにチームで支援プログラムを検討する体制が機能している。担任が一人で抱え込まないように、適切なサポートができるように互いのコミュニケーションを大切にしていきたい。昨今の支援を必要としている生徒への対処の仕方も、多様化もあって従来と同じような形では立ち行かなくなっている。それらコーチング力の学習会もしていきたい。 この支援機養育委員会は、いじめ防止対策委員会を兼ねている。いじめについての相談があった際に招集することになっている。
V. ICT教育の 推進	ICT教育の 推進	ICT技術を、今後の探究型、横断型授業に活かしていくことができるように研究する。 下記のICT教育推進のためにガイドラインの策定を行う。 (1)中高校舎のWi-Fi環境の整備を行った。Wi-Fi環境の整備計画を策定し、チャペルなど順次工事を行う。 (2)モニター教員にタブレット型情報端末を配布した。研究を進める。 (3)中学1年生(高校1年生)の入学時のタブレット型情報端末保持を想定し、克服すべき課題等について検討する。 2018年度は、IBコース生とのみ個人端末機の保持をスタートさせた。他科・コース生については学校備品貸し出しで展開をする。 (4)教師、生徒のタブレット管理はもとより、セキュリティーについても対策を検討する。	8. 授業において、電子黒板、プロジェクター、MM教室等が有効に活用されていると思うか。 27. ICTを利用した授業等への取り組み、今後の計画は進んでいると思うか。	69% 47%	学習に関わる環境、施設整備については、重要課題として取り組みを続けている。電子黒板、MM教室については少しずつ利用が進んでいる。 学校全体として、生徒各自にタブレットを持たせる方向での準備を進めている。特に次年度の高校1年生からeポートフォリオの作成のため、高1学年生徒全員に“Classi”を導入した。 それでも、全生徒に個人端末機を保持させることにはまだ時期尚早との判断で行わず、中学校のそれぞれ1学年分の端末機“Clomebook”を学校備品として設置している。個人保持の環境を早く整備していきたい。2018年度中学3年生は、探求授業として活用を始めた。これを足がかりに、多くの授業、行事での活用が進み、生徒達の学習支援となるようにしていきたい。
VI. 教務の 新システム 導入	教務新システムの導入 準備	(1)成績処理等のための入力に関しては、独自のシステムではなく、新システムに移行することも視野に入れ、本格的に研究する。 (2)各会議や出席管理から成績処理に至るまでタブレット型情報端末を利用した新しいシステムに移行する準備を始める。			学新システム導入のために作業をしていたが、年度途中に従来使用中のサーバーに不都合が生じ、その対処に追われることとなった、よって、年度末完成予定であった新システム移行は半年後ろにずれ込む形となっている。教務担当教員には多大なる尽力をいただいている。
VII. 危機 管理	危機管理	(1)大地震を想定した危険回避訓練を、教職員で検討する。また食料・水等の備蓄の拡充、自宅への連絡方法の確認、帰宅困難者がした場合の対策について検討する。 (2)地域の避難所としての対策を検討する。重要情報・個人情報の管理の対策を行う。	39. 学校の地震をはじめとする防災への備えは進んでいると思うか。	64%	地震を中心とした防災への備え、避難訓練等、取り組みは進んでいる。非常食、水の備蓄、非常電源の確保、簡易トイレ等、購入を進めた。今後も地域と協力して計画的に進めていく。 2018年6月に起こった「大阪北部地震」では帰宅困難な生徒、教職員があった。その為に急遽バスをチャーターして帰宅補助を行う措置をとったことは貴重な経験となった。
VIII. 施設・ 設備の 保全と 充実	施設設備の改修	・高校北・東校舎外壁補修工事を行う ・その他の施設について、整備等、優先順位を決めて工事の計画を進める。	41. 校舎、校庭、グラウンド等の施設設備の保全、補修、整備について必要に応じて、計画、実施されていると思うか。	60%	高等学校北校舎・東校舎外壁補修をはじめ、その他の設備補修を生徒・保護者と教職員の理解と協力を得ながら進められている。 Windows10への移行措置に伴い、次年度早々にMM教室のPCを入れ替える予定にしている。

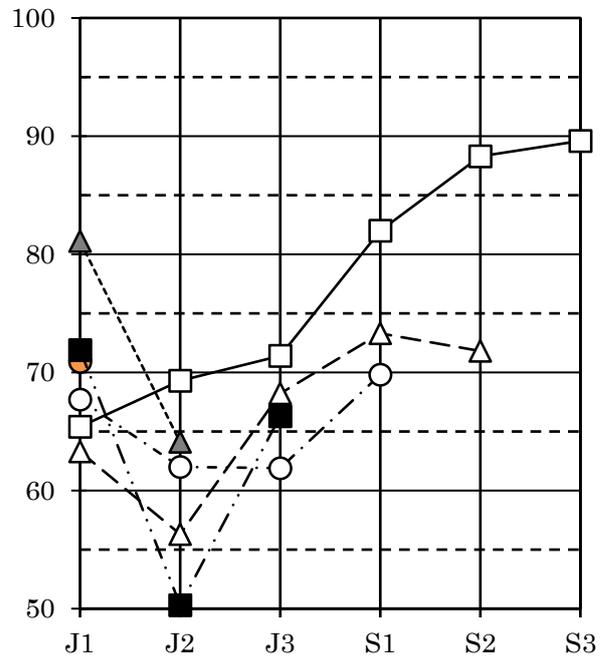
IX. 教員の 労務環境改善	教員の 労務環境改善	<ul style="list-style-type: none"> ・1週1日の研修日の維持改善に努め、より働きやすい職場にしていくよう努力する。 ・育児短時間勤務を3歳から小学3年生までと改訂。 ・今後は介護休暇についても検討を進める。 ・また、出勤管理のIT化にも検討を進める。 	40. 一週一日の研修日をはじめて3年目になるが、その方策も含め、労務環境の改善は進んでいると思うか。	64%	1週1日の研修日制度は有効であるが、当然のことながら、生徒教職員全員で一斉に取る休日とは違うので、教職員間の連携、クラス・学年・教科間の情報共有が不可欠となる。また臨時の会議をすることが難しく、定例の会議の回数も限られるので、計画性と工夫が必要である。
X 経費削減と効率化	経費削減と効率化	<ul style="list-style-type: none"> ・中高大短、法人の事務の一元化を適宜進める。 ・諸経費の見直し、管理部門の経費削減と効率化を図る。 ・補助金制度を有効活用する。 			各部門の経費の健全化に努めている。

宗教教育

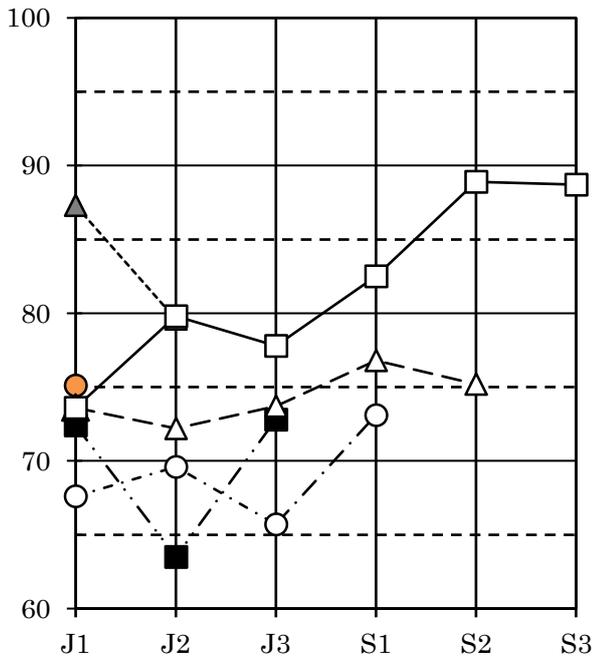
質問1:キリスト教主義学校の方針の理解



質問2:礼拝による生き方、他者との関係の深まり

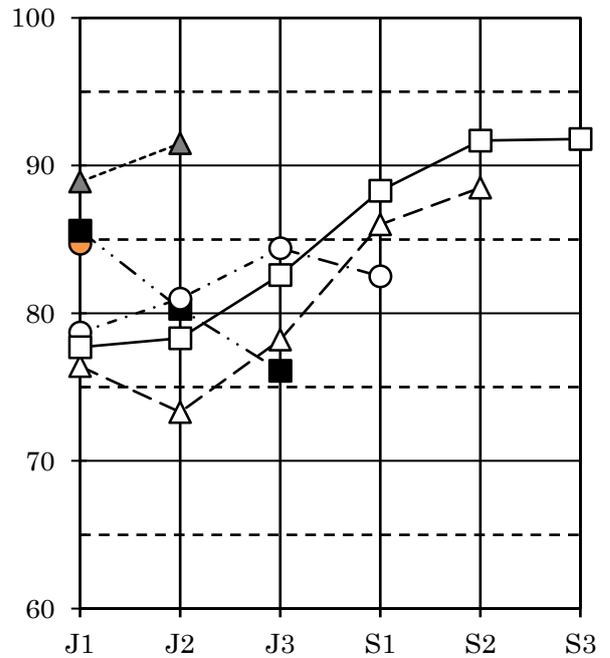


質問3:宗教行事による生き方、他者との関係の深まり

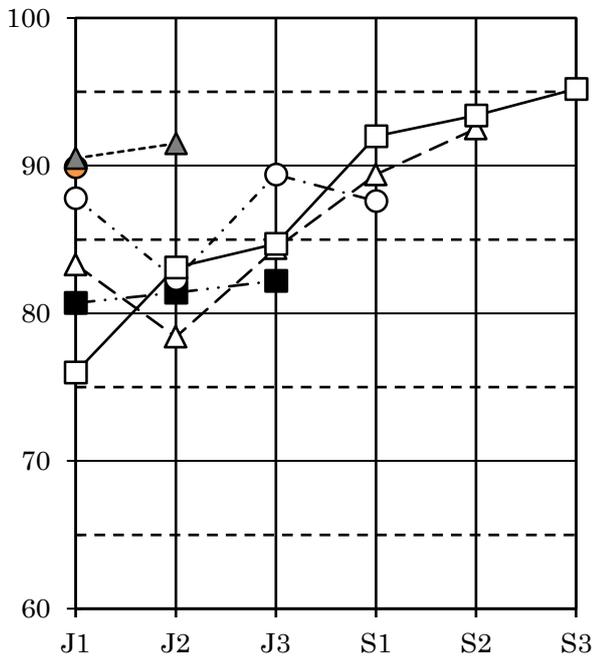


解放教育

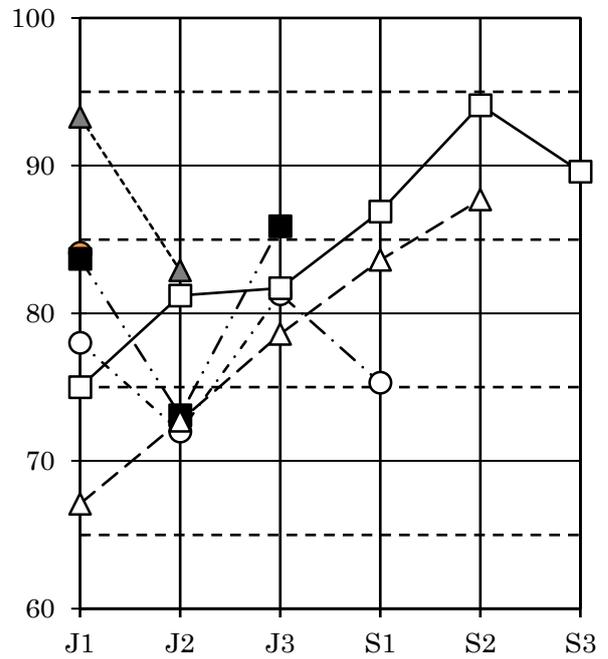
質問4:本校の解放(人権)教育への理解



質問5:個性を尊重、違いを認め合うことができるか

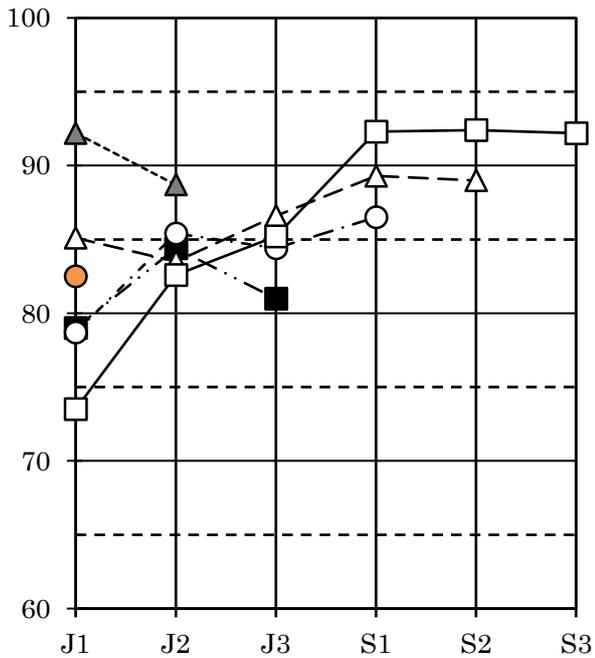


質問6:解放教育を通して知識と人権感覚が身についたか

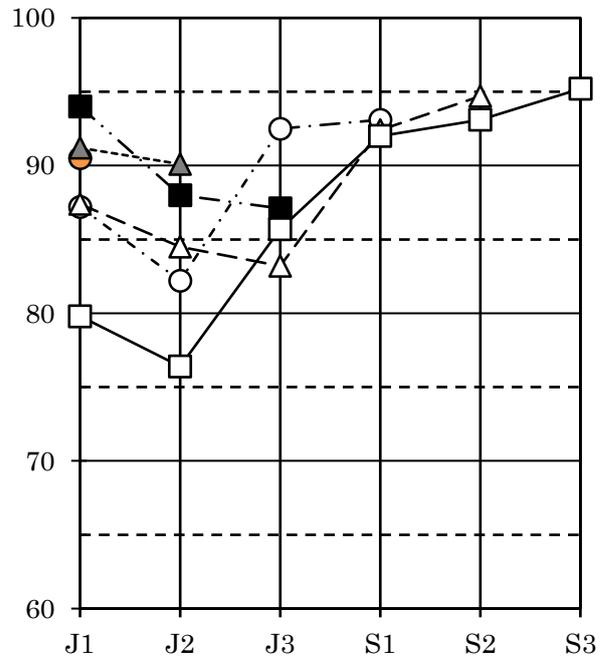


生活指導

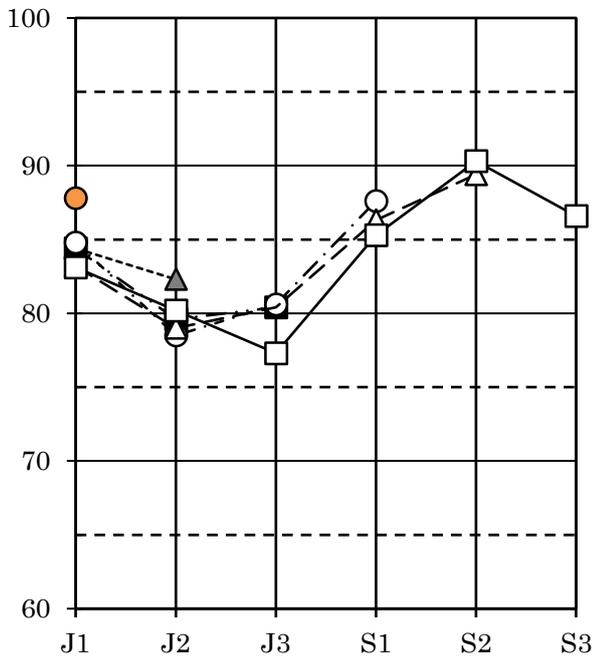
質問7:本校が大切にしている「本当の自由」を理解しているか



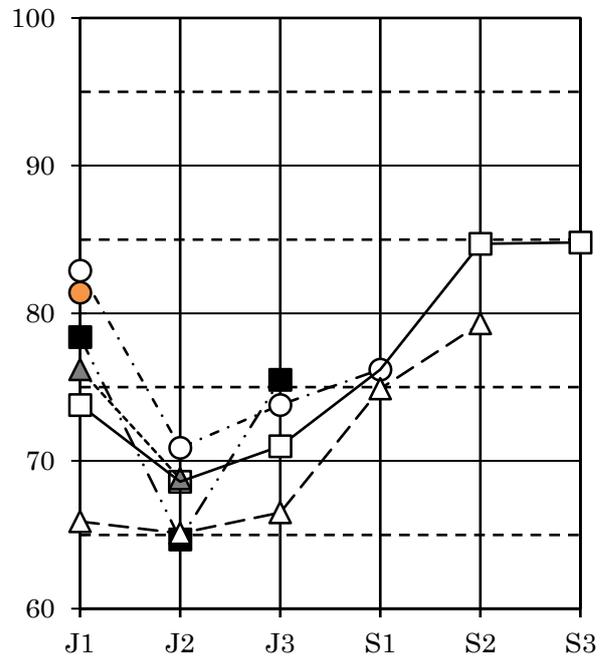
質問8:社会ルール、公共マナーが身についているか



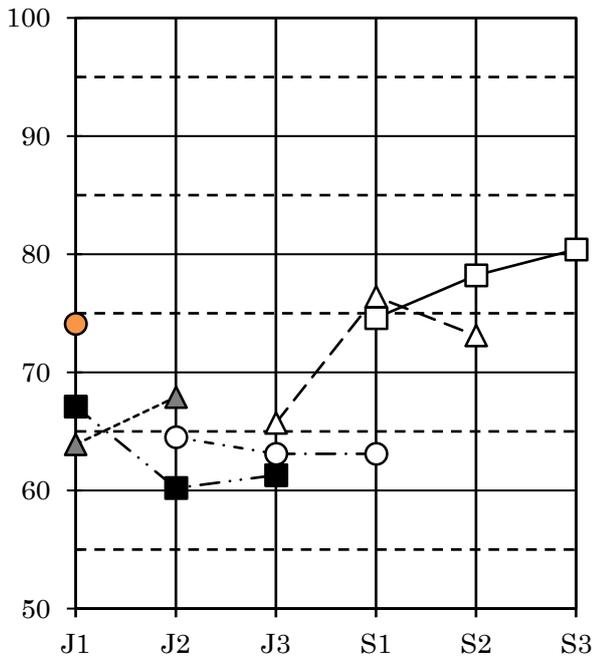
質問9: 基本的な生活習慣が身についているか



質問10: 心に届くコミュニケーション-挨拶に取り組んでいるか

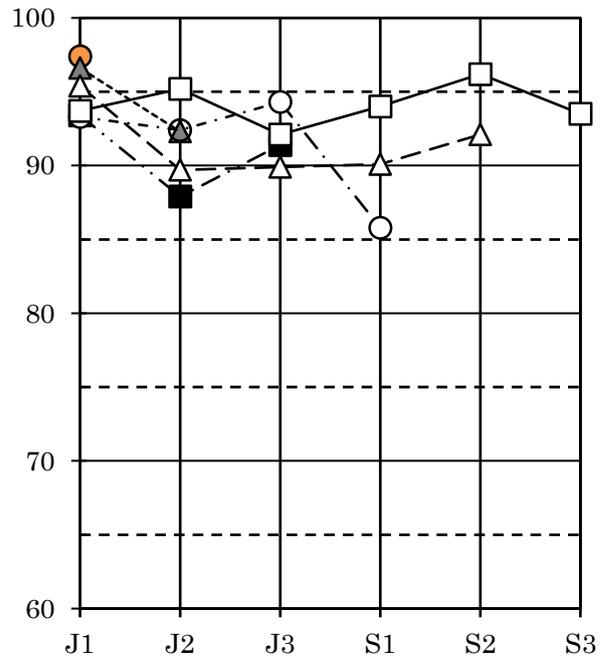


質問11: 目標に向かって計画的に自己管理ができているか



学校行事

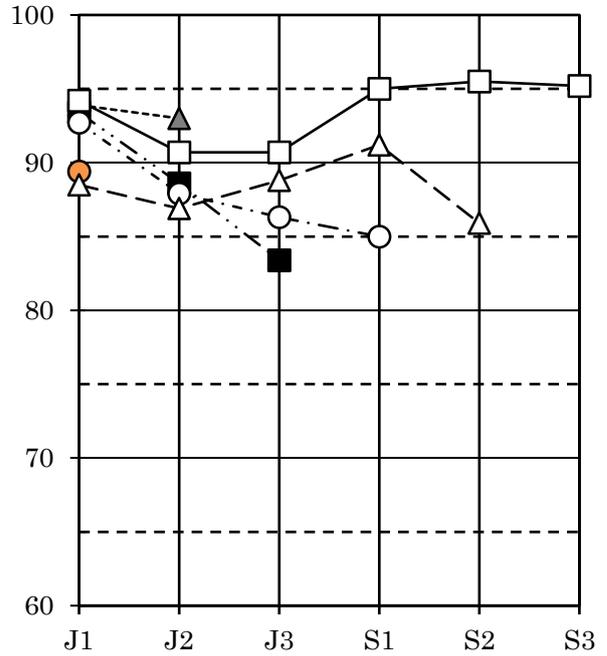
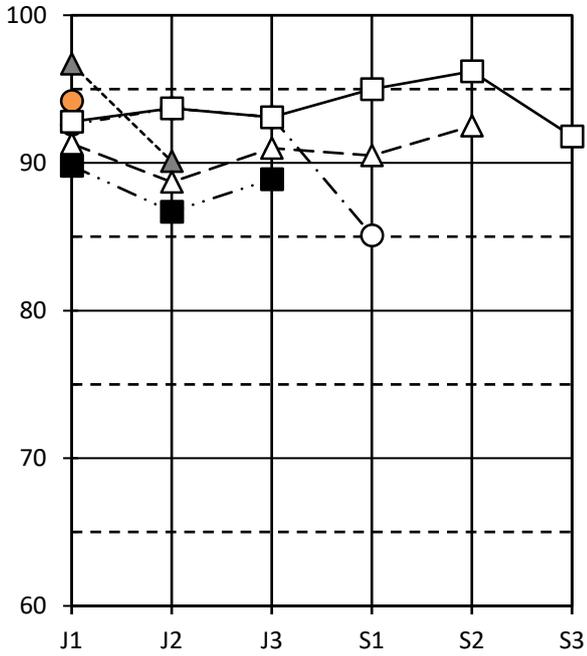
質問12: 生徒会行事は生徒同士の関係を深めるのに有効か



学校生活

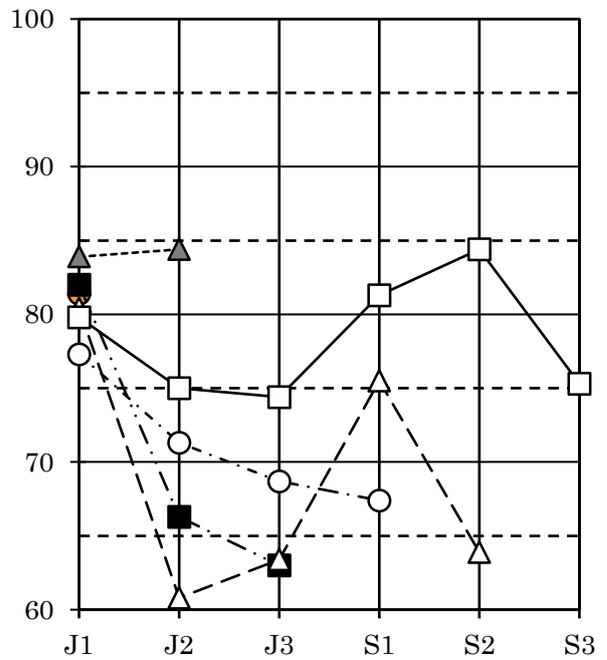
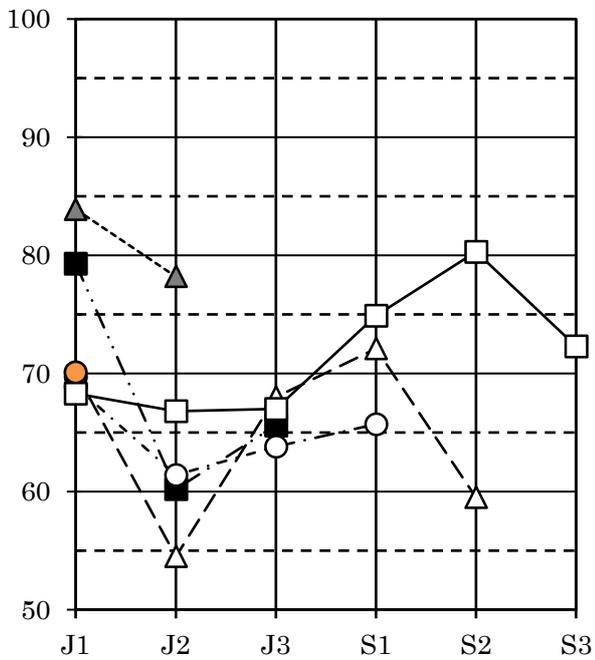
質問13: 学年行事は友達・クラスの間を深めるのに有意義か

質問14: 学校生活は楽しく充実しているか



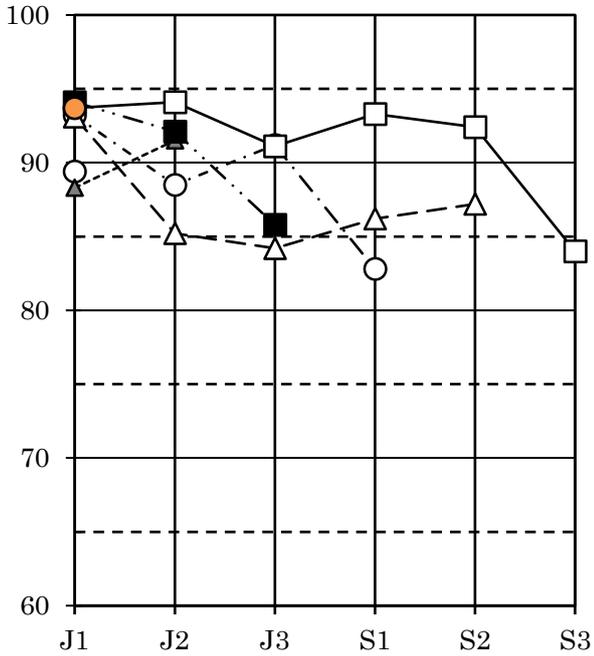
質問15: 先生は生徒の悩み相談にのってくれるか

質問16: 先生は生徒の充実した学校生活の為に指導しているか

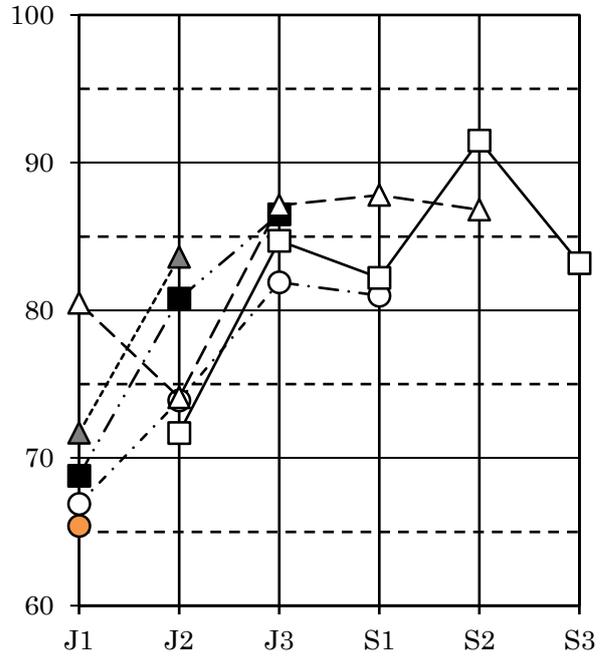


進路指導

質問17: 本校のクラブ活動は活発な方か

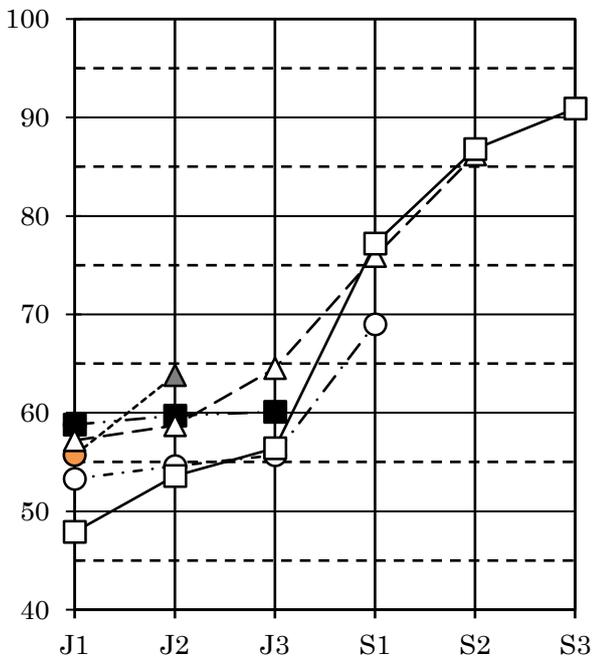


質問18: 中学/高校の学科コース選択についてよく考えている

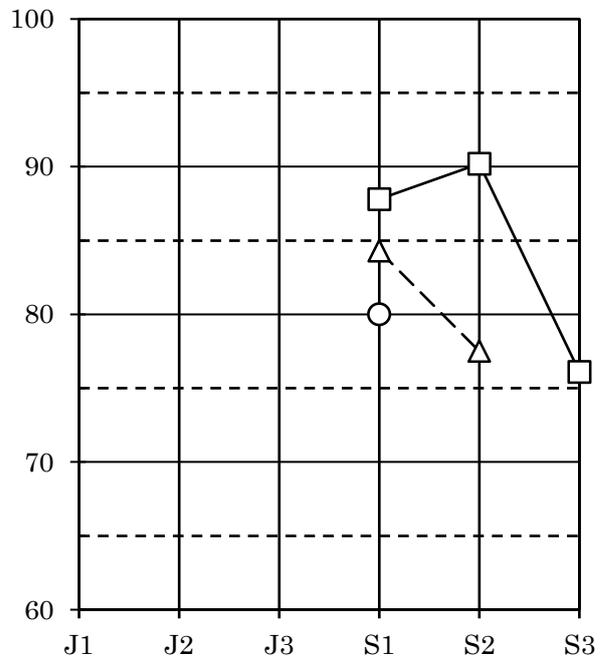


国際理解教育

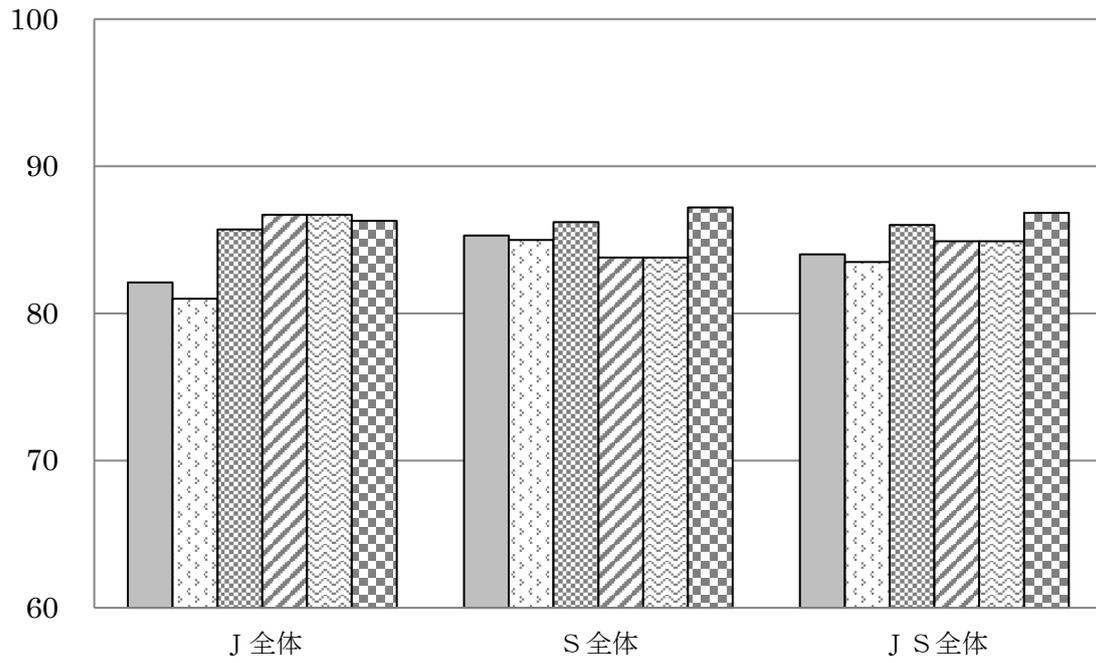
質問19: 高校卒業後の進路についてよく考えている



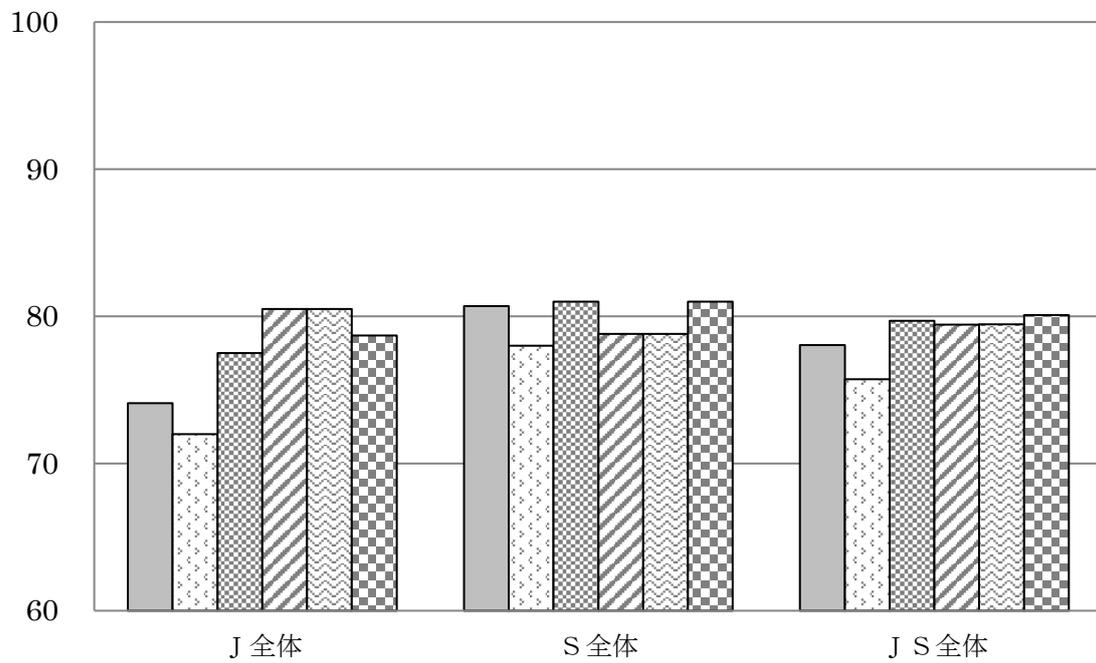
質問20: 留学生の受け入れにより国際理解が深められているか



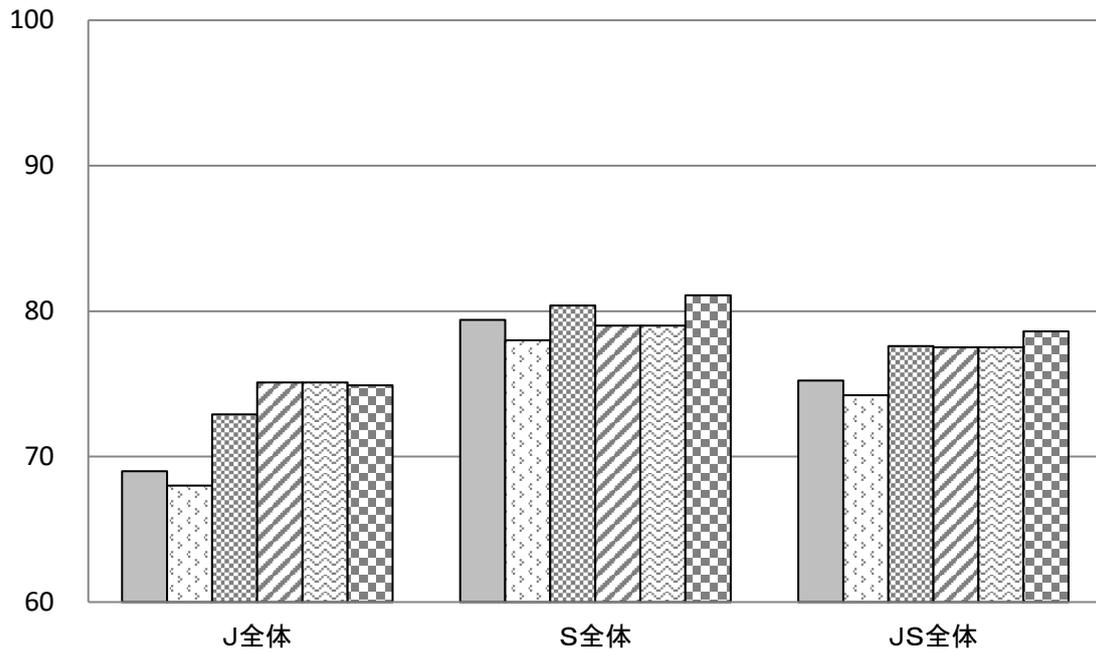
質問A：年間計画が立てられている



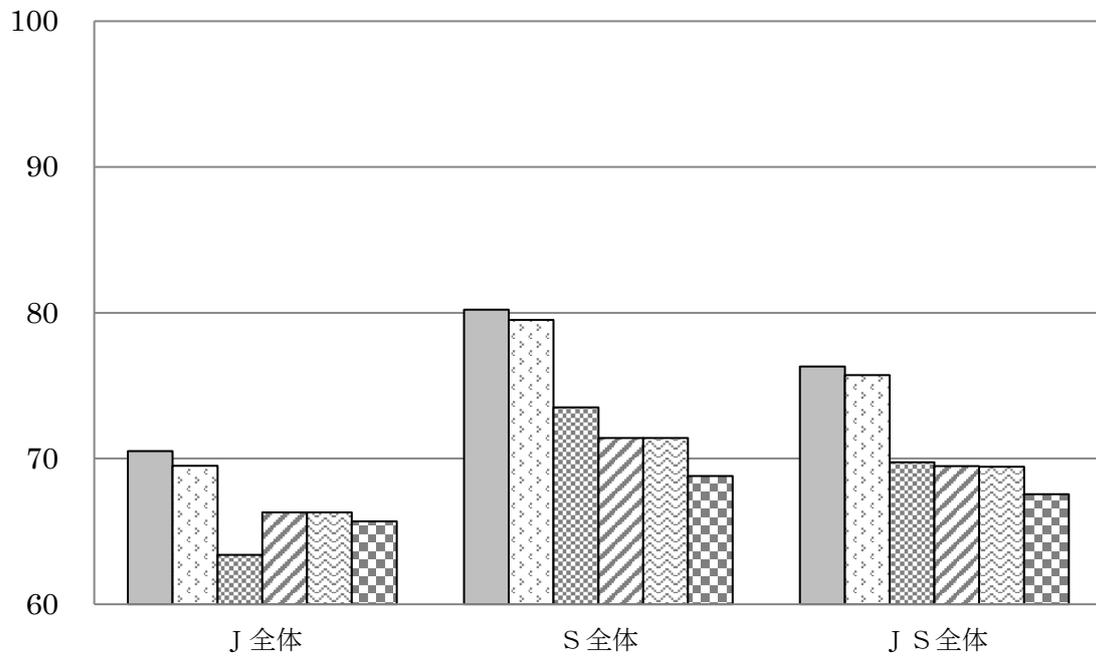
質問B：説明がわかりやすい



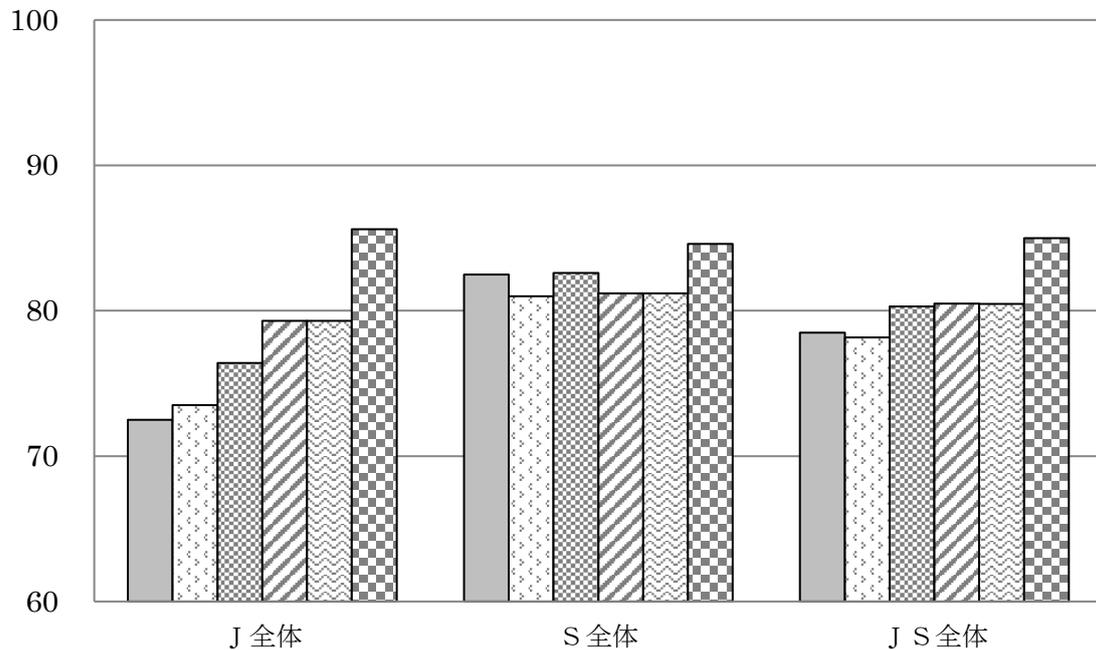
質問C：私語への対処、クラス全体の一体感



質問D：教科内容に、より興味を持てる



質問E：集中して受けている



<グラフについて>

1. すべてのグラフの縦軸の値は%です。
2. 質問1～20までの折れ線グラフについて
 - ————— 2013年J入学・2016年S入学生の値と推移
 - △ - - - - - 2014年J入学・2017年S入学生の値と推移
 - - · - · - · 2015年J入学・2018年S入学生の値と推移
 - - · - · - · 2016年J入学生の値と推移
 - ▲ - - - - - 2017年J入学生の値と推移
 - なし 2017年J入学生の値
3. 質問A～Eまでの棒グラフについて
 - 2013年度調査データ
 - 2014年度調査データ
 - 2015年度調査データ
 - 2016年度調査データ
 - 2017年度調査データ
 - 2018年度調査データ